

心理学科

こころについてのエッセイ [1]

チャムシップとピアシップ

みなさんは同級生や友人との人間関係に悩んだことはありますか？ずっと同じでもなく、なんだか以前と違うな、うまくいかないな、と思ったことがある人もいれば、変わってきて少し過ごしやすくなった、という人もいるのではないかと思います。実はこの同級生や友人との人間関係というものは、年齢や時期（発達段階）によって変化するとされています。

小学校高学年～中学生頃からはじまる思春期の子どもたちの同年代の関わりを、アメリカのサリヴァンという精神科医は「チャムシップ」と呼びました。

これは簡単に言うと仲間グループを作って“同じであること”を大切にする関係性で、秘密を共有するなどして、互いの共通点を確認し合うという特徴があります。思春期の女子は仲間グループを作りやすいとよく言われますが、これがまさに「チャムシップ」



で、こういった仲間グループは親から自立していくときに生じる不安を支えてくれるものでもあり、これはこれで大切な時期です。

しかし、高校生以降になると、段々と“みんな同じ”だった仲間グループの中にも、個性の違いや能力の違いが生じてきます。そうすると今度はそれぞれの趣味や将来のこと、価値観などを話し合い、“同じであること”よりもむしろ他の仲間と“異なるところ”に気づいていくようになります。このような“異なるところ”を認め合い、それでもその仲間集団が居場所であることを感じられるような関係性を「ピアシップ」と言います。このように互いに異なる部分を持ち合わせていても、自他の違いを認め合いながら友人関係を育

むことができるようになってくると、少し同級生や友人との関係が広がってきます。

「みんなちがって、みんないい」というのは金子みすゞさんの有名な詩のことですが、友人関係でもそう思えるようになっていくことが、大人に近づく一歩であると言えるでしょう。

